

## 〈提言〉

中野三敏（九州大学名誉教授）

### 【要旨】

江戸の儒学は、従来「朱子学」中心と説かれる事が多かったように思うが、本当にそれで良いのだろうか。寧ろ初めから陽明学中心とするべきではなかったか。

理由

- (一) 時代的には明末・清初（元和二年 1616～寛文二年 1662 まで明・清並列）に当り、学問世界の常態として最新の学説が喜ばれる。朱子学は宋代（960～1280）の学ゆえ、江戸からは既に五百年以上前の学説であり、江戸では明儒の説が最新の儒学である。
- (二) 惺窩の読書傾向は明らかに明儒に偏り、身边にも舶載の明儒の書は多い。
- (三) 宋学から明学への展開は、吾国では新儒学の一発展形態と把握されたのではないか。
- (四) 藤樹・蕃山等の陽明学派も、朱・陸同根説、或いはその兼学を主唱した。
- (五) 李卓吾のような狂激な右派的存在へも十分に目が届いている。
- (六) 禅心学—朱子心学—陽明心学といった展開は、吾国知識人にとって、極めて自然な入り易い結果ではなかろうか。
- (七) 中国の陽明学異端視は、吾国知識人の視界に十分届いていた筈だが、それは科挙の制度に拠る事も理解されていて、羅山などはその制度の日本流入も必然視していたものか。徂徠の暴走（道外在説）の結果、寛政の改革となって科挙が意識され、朱子学の官学化が進む。
- (八) 仁斎・徂徠等の朱子学批判も、陽明学受容の結果と見ればわかり易い。仁斎の人情中心・人間肯定の思想も、当代人にとっては陽明学的風気の必然と考えたか。
- (九) 徂徠の個性・人欲の肯定、諸子学への目配り、史学・文学の重視など、「道の外在化」という正反対から出発して頂上に至れば陽明学と一緒にだったという島田氏の説明は説得力を持つ。
- (十) そこに気附く為のツールとして、私は近年「和本（くずし字）リテラシー」の必要性を強調している。

江戸の俗文学界は三教一致という陽明学的な風気の受容に始まり、仁斎の人情中心主義を体して芭蕉の庶民性・西鶴の人間肯定・近松の人情劇となり、気一元論に基づく実学に展開して本草・物産の学（益軒、安貞）が流行し、十八世紀に入ると、洋学の流入により世界の圧力を受けて物産会（国益思想）に広がり、徂徠学の発展に伴って個性（近世的自我）に気付き、例えば絵画などにも辻氏の所謂「メインカルチャー綺想の絵師」（若冲・蕭白・禅画・南蘋派・芦雪等）と展開するが、文芸の領域は尚「雅」（韻文）を第一文芸、「俗」（散文）を第二文芸

とする意識はゆるがず、サブ・カルチャーの極致としての戯作は「雅」のパロディに終始して表現第一主義に徹する。